

『背徳者』

——ジッドをどう読むか——

堀 畑 正 樹

は し が き

ジッドが処女作『アンドレ・ワルテルの手記』(1891)を書いてから一世紀近くを経ようとしている。この間に様々なジッド研究、批評が行なわれてきた。非常に大まかにこれらのジッド研究を分類すれば、伝記的研究と作品論に大別される。作品論は作品を外的なものによる説明を一切、いやできるだけ排除して、作品をひとつの完結したシステムと見做して解釈を試みようとするものであり、その最もすぐれたものは作品の内的構造を解明しようとする。実際の成果をみると、伝記的研究の極にジャン・ドレの『ジッドの青春』⁽¹⁾がある。他方、作品論の立場に立つ研究、批評はと言えば、残念ながら、研究の動向を決定づけるに足るジッド研究がまだ現われていない。いやむしろ、奇妙なことだが、ジッドの作品が本格的な作品論の観点に立つ研究、批評の対象から外されてきた⁽²⁾というのが実情である。

作家がものをかくとき、基本的には、

- (1) 作者
- (2) 表現しようとするもの
- (3) 表現されたもの

という関係が成り立つだろう。伝記的研究は、実際には、そのほとんどが作者の書き残したものを資料にして作者を描き出そうとするものであるから、作者

自身の言っていることを解説ないしは敷衍するに留まる⁽³⁾。一方、作品論は作品の内的構造を解明することにその基本があるが、実際にはジッドの場合、作品そのものの研究ではなくて、作品のテーマ研究といったものに留まってしまふことが多い。

ところでジッドのように書く主体と作品がとりわけ密接な関係をもつ作家の場合、焦点を当て、解明しなければならないのは、作品と主体の関係なのである。つまり、作家の書き残したものを資料としてのレベルにしか置けない伝記的研究や、作品をあるひとつのレベルでしか扱えないような作品論はあまりその持てる力を十分に発揮できない。物語の構造分析の在り方を探っているロラン・バルトは「物語の構造分析序説」⁽⁴⁾で、物語が持つ様々な水準、レベルを識別し、それらを再び「階層組織関係」に置く読み方を提案しているが参考になるろう。

ジッド研究をこのように概観してみると、書く主体ジッドと作品を同時に捉え得る読み方を模索しなければならない時期にきていることが頷けよう。このような新しい読み方を探っているものとして、すこし古いところでは、《Tu avais l'air ou d'un criminel ou d'un fou.》⁽⁵⁾ という一文からジッドと作品の関係のみようとするアンリ・ランボアの遣り方、新しいところではフィリップ・ルジュヌヌの、ジッドが作り出している自叙伝空間の構造分析⁽⁶⁾が暗示的である。⁽⁷⁾

I. ジッドをどう読むか

ジッドの書いたものをほぼ年代順に読みすすめてゆき、その全体を振り返るとき、奇妙な宣言に気付く。その宣言とはジッドが始めてアンドレ・ジッドという名のもとに公けにした『ナルシス論』の注、1891年から1893年にかけての『日記』にとりわけ見出しされるものである。即ち、ジッドがものを書き始めてから、ジッドの文学活動に重要な役割を果すことになる1893年10月のアフリ

カ旅行直前までの期間に書かれたものである。まずは1890年に書いたと記されている『ナルシス論』の注から見ることにしよう。

《Nous vivons pour manifester. Les règles de la morale et de l'esthétique sont les mêmes (...)

Tout représentant de l'Idée tend à se préférer à l'Idée qu'il manifeste. Se préférer — voilà la faute. L'artiste, le savant, ne doit pas se préférer à la Vérité qu'il veut dire: voilà toute sa morale; ni le mot, ni la phrase, à l'Idée qu'ils veulent montrer: je dirais presque, que c'est là toute l'esthétique.⁽⁸⁾》

我々が生きるのはアイデアを明示するためなのだ、と言う。この考え方は非常に早くからジッドの奥深くに根をおろしていたらしく、『日記』の中で「文学と道徳」という標題のもとに、我々人間はアイデアを地上という舞台上で演じるために生まれているのだ、だからして我々は何かを演ずる者としての価値しかない、という趣旨のことを言明している。⁽⁹⁾とすれば我々の道徳は手段たる我々自身を捨ててアイデアを忠実に明示し、真実をありのままに表現することにあるのではないか。他方美学はと言えば、本質はアイデアをその表現手段たる語、文に優先させることにある。つまり、我々はアイデアを明示するために生きているのだという考え方に立てば、道徳律と美学法則は同一になってしまう、と言うのである。作者はこれを何も新しい理論ではないと断ってこうつづける。

《La question morale pour l'artiste, n'est pas que l'Idée qu'il manifeste soit plus ou moins morale et utile au grand nombre; la question est qu'il la manifeste bien.⁽¹⁰⁾》

つまり、芸術家ないしは真の人間の道徳は、明示するために生まれているアイデアをどのくらい忠実に表現するかどうかにあると主張しているのである。ところでこの主張を裏返せば、作品に表現される道徳感を作者のそれとして判断しないでくれ、作者の道徳感は明示しようとするアイデアにどのくらい忠実か否かで測られるべきなのだからということになる。ジッドはこれから書く作品を読者が現行の道徳ですぐさま判断を下さないよう予防線をはっているように

見える。

次に『日記』を見てみよう。人間としての sincérité と <sincérité artistique> との関係が問題になっている。上に述べた、ジッドの主張する道徳と美学の関係を念頭に置きながら読んでみよう。

《Je m'agite dans ce dilemme: être moral; être sincère.

La morale consiste à supplanter l'être naturel (le vieil homme) par un être factice préféré. Mais alors, on n'est plus sincère. Le vieil homme, c'est l'homme sincère.

Je trouve ceci: le vieil homme, c'est le poète. L'homme nouveau, que l'on préfère, c'est l'artiste. Il faut que l'artiste supplante le poète. (...)

注目すべきことは、ジッドにとって moral であることと sincère であることが対立していることである。対立しているからこそ、『ナルシス論』の注で見たように、道徳律と美学法則の一致を説いて、作者の道徳感を読者の判断から守るというしくみを編み出さねばならなかったのではないか。そこでもう一箇所引用することを許してほしい。今までみてきたことと相補うもので、1891年12月31日の日付がある。

《La chose la plus difficile, quand on a commencé d'écrire, c'est d'être sincère. Il faudra remuer cette idée et définir ce qu'est la sincérité artistique. Je trouve ceci, provisoirement: que jamais le mot ne précède l'idée. Ou bien: que le mot soit toujours nécessité par elle; il faut qu'il soit irrésistible, insuppressible; et de même pour la phrase, pour l'œuvre tout entière.》

これまでの引用文との関連でこの一節を読みとるならば、ジッドはものを書く時、とりわけ <sincérité> という問題が彼の前に立ちはだかる。そこでもものを書く時には人間としての sincérité に従わず、<sincérité artistique> に従うと主張するのである。<sincérité artistique> についてはとりあえずこう定義される：アイデアが表現手段に必ず優先し、アイデアに不可欠でない語、文、ひ

いては作品を一切削除する。

以上『ナルシス論』と『日記』に見い出される奇妙な宣言を検討してきた。内容を一口で言えば、道徳律と美学法則の一致を説いて、読者に作者の道徳意識について判断中止を求めたものであった。そしてジッドがこの宣言を必要としたのは、彼にあっては *moral* であることと *sincère* であることが対立しているからだということもすでにみた。

ところで、自分はこれからこれこれの行為をしようがそれについては現行の道徳ですぐさま判断しないでくれ、自分の全体像が明らかになる時まで判断を中止してほしい、今やっていることは仮の道徳のもとにやっているのだから、というような主張がどういう場合に起きるか考えてみてほしい。個人がある組織団体に属するとき、組織に対する忠誠の度合がその個人の道徳意識を証明し、保証するかのごとき事態が生じはしまいか。とりわけこの現象が見られるのは、この組織が公けには許されていない何かを企てようとする時ではあるまいか。つまり、ジッドが道徳感を測る基準の変更を申し出るのは、彼が何か公的には許されてないことを企てようとしているからである。そしてその企てとは——ジッドが明示しなければならぬと考えるアイデアとは——彼の本性である同性愛を公認させることではあるまいか。

Ainsi soit-il の一節がこの推測を裏付けてくれる。問題になっているのは、ジッドが青年マルク・アレグレと旅行した際、最初の宿営地に辿り着くのに二人並んでは通れない森林に足を踏み入れた時に味わった感情である。ジッドはその時の経験をこう回想している。《C'est un des instants de ma vie que je souhaiterais le plus de revivre.》⁽¹³⁾ 考えてみると、外的に何か特別なことが起こっているわけではない。してみると、このような経験はジッドのマルク・アレグレに対する恋愛感情を抜きにしては理解しがたいのではないか。

このことが理解されると、この仮説を立てると、『日記』の他の部分が生きる。ジッドが何を問題にし、何を言わんとしているのかよく合点がゆくようになる。⁽¹⁴⁾ ジッドは彼の本性を擁護し、公的に認めさせるその方法を探っているの

である。

まずは現行の道徳の理不尽さを闘牛を喩えにして説く。1893年3月の末か4月初旬のことらしいが、スペインで闘牛を見た時の印象をこう語っている。

《Courses de taureaux.

Qu'on tue quelqu'un parce qu'il est en colère, c'est bien; mais qu'on mette en colère quelqu'un pour le tuer, cela est absolument criminel.

On tue le taureau en état de péché mortel. On l'y a mis. Il ne demandait, lui, qu'à paître. Etc.》⁽¹⁵⁾

この一節はまた1893年10月のアフリカ旅行直前、モンペリエで書かれた次の一節と呼応する。キリスト教の理不尽さを述べている。

《Le christianisme, avant tout, console; mais il y a des âmes naturellement heureuses et qui n'ont pas besoin d'être consolées. Alors, celles-ci, le christianisme commence par les rendre malheureuses, n'ayant sinon pas d'action sur elles.》⁽¹⁶⁾

つまり、自分はただ自然に生きようとしているだけなのに、人々（キリスト教、既成道徳）はまず自分を罪を犯した人間にして、それから断罪し慰める。これは犯罪だと言うのである。

次にジッドが自分の本性を認めさせるために用いる方法は、〈se laisser aller à soi-même〉することがどんなに難しく、努力を必要とするものであるかを力説することである。1893年の『日記』の到る処に見い出されるから引用は差し控える。困難を乗り越えて辿り着いたものならば社会は容認せざるを得ないというのであろう。

さらに追い打ちをかけようとして、ジッドは擁護運動の展開の仕方を探る。これまで彼が用いてきた方法は消極的なものであった。もうひとつ例を挙げてみよう。その趣旨は、確かに現行の道徳は私を導き、支えてくれた、しかし最後には私を墮落させてしまったのではないかと言うのである。⁽¹⁷⁾

ここでジッドは方法を変える。「自分の奥底にある願望の総体」を前面に出

し、そのすばらしさをうたうという積極的な方法をとるようになる。幸福の見本を見せる方が自分の主張を人々に認めさせるに力あることを、この頃、ゲーテを読みながら理解したのかも知れない。この方法の転換はこれまでジッドが書いてきた『アンドレ・ワルテルの手記』、『ナルシス論』、『愛の試み』と以後の『地の糧』、『背徳者』、『一粒の麦もし死なずば』、『贖金つかい』等と比較すればよくわかる。因みに『贖金つかい』から一例をとってみよう。オリヴィエがエドワールの部屋で自殺するくだりである。この自殺する動機に積極的な擁護が見い出される。バルナールがオリヴィエにドミトリ・カマラゾフが言うように「熱狂のあまり」、即ち、生の充実感のあまり自殺することがあるということを理解できるかと尋ねた時、彼は理解できると答えたと言うのである。但し、こういう条件付きで：

《(...) mais seulement après avoir atteint un tel sommet de joie, que l'on ne puisse, après, que redescendre.》⁽²⁰⁾

オリヴィエが叔父に当たるエドワールに再会して味わうあの幸福感は、ルソーがレ・シャルメットでヴァランス夫人と共に過した日々⁽²¹⁾に味わった幸福感に他ならない。

これまで、ジッドを煩わしている問題は彼の本性、同性愛をどう擁護するかにあるということを指摘してきた。それというのも、このことを念頭に置いた方がよりよくジッドを読むことができるからに他ならない。念頭に置いておかないとよりよい理解ができないものの総体が、ジッドの全体像を浮びあがらせる重要な武器になると考えているからである。⁽²²⁾何を念頭に置いたらジッドの書いたものをよりよく理解できるか？ ジッドが自分の本性を擁護するために、どのような方法を各作品において用い、またどのように発展させていっているかということの意識化もそのひとつなのである。

では次に、この観点を意識化した上で、作品をひとつ読んでみることにしよう。

Ⅱ. 『背徳者』

まずはテキストに身を委ねよう。そしてそこに見い出される特徴的な表現の分析を通じて、内容を検討してゆくことにする。

『背徳者』は少壮学者ミシェルが自らの「願望の総体」を実現しようとして背徳を重ねてゆく物語である。しかし、何も最初からミシェルに現行の道徳に逆らおうという意志があったわけではない。

《le prêtre m'accepta; moi j'acceptai le prêtre:(...)⁽²³⁾》

この文（の構成，調子）は社会とミシエルの間に間隙がないことを表現している。他方，作者はこの引用文の前後でミシエルに，当時自分が何物であるか全然知らなかったんだ，と二度繰り返させている。社会との間に間隙が意識されない時，個人は決して自分の正体など考えようとはしない。

ミシエルはマルスリヌと結婚して，アフリカへと新婚旅行に出かける。甲板に立ってようやく勤勉であわただしい生活から一時解放されることになる。そしてこの時始めて考えに耽る。考えに耽るのが始めてというのではない。彼は一端の知識人である。そうではなくて，始めて自分の生き方に考えが及んだのである。馴染みの大陸を離れることは今までの自分の生き方を突き放して見ることと重なる。この辺のところを作者はどのように書いているか引用してみよう。便宜上，引用文に番号をつけておく。

(1) 《Le loisir obligé du bord me permettait enfin de réfléchir. C'était, me semblait-il, pour la première fois.⁽²⁵⁾》

(2) 《Pour la première fois aussi, je consentais d'être privé longtemps de mon travail.⁽²⁶⁾》

(3) 《Elle était assise à l'avant; je m'approchai, et, pour la première fois vraiment, la regardai.⁽²⁷⁾》

(4) 《Pour la première fois je m'étonnai, tant cette grâce me parut

(28)
grande.》 (傍線筆者)

(1)から(4)への過程に注意してほしい。各文に *pour la première fois* が含まれているが、この「始めて」がミシェルの変貌してゆく過程の節目であることが『背徳者』を読みすすんでゆくうちに理解される。大陸を離れ甲板に立って「始めて」考えに耽った時はまだ何ら具体的な変化がミシェルに起きてはいない——*réfléchir* と不定法に置かれている (1)。しかしすでに何かミシエルのうちに起ころうとしているのである——*consentais* とそのような状態を表現する半過去に置かれている (2)。そしてミシエルの身に変化が起きる——「始めて」他者である妻マルスリヌを注視し、その美しさに驚くのである (3) (4)。

つまり、ミシェルが他者の存在を認識するに至ったのである。確かにこれまでに彼には友だちもいたし、学会の交際もあった、しかしミシェルにとって他人というものが存在していなかったに等しい。他者の存在が彼の意識の表層にとどまり、決して意識の奥深くまで食い込むことがなかったのだ。社会にすっぽりと嵌まり込んでいたために、社会と直接交渉をもつことがなかったのである。(1)から(4)へという過程はミシェルがこういう状態から抜け出して、他者と従って社会と直接交渉をもつようになったことを意味する。一人芝居 (monologue) は終わった。⁽²⁹⁾ 作者はこの認識過程をこう表現している。

«Ainsi donc, celle à qui j'attachais ma vie avait sa vie propre et réelle! L'importance de cette pensée m'éveilla plusieurs fois cette nuit; plusieurs fois je me dressai sur ma couchette pour voir, sur l'autre couchette plus bas, Marceline, ma femme, dormir.»⁽³⁰⁾

最後の部分の二つの句点が、ミシエルの意識に他者マルスリヌの存在が食い込んでゆく様を表現する。それにこのマルスリヌは喋っているのでもなく、死んでいるのでもない、眠っているのである。他者が我々にその存在の重みを一番感じさせるのは、思うに眠っている時ではあるまいか。

次に問題になるのが病気の効用である。病気の効用についてのジッドの見解

は、特に『日記』や『ドストエフスキー』に窺われるが、ほぼ定まっている。病気は我々に新しい不安を起こさせる一方、その不安を乗り越えて平衡へと達しようとする努力を我々に強いるがために、病気は我々を活性化し、眠っている力を引き出す機能を果す、というのがその要旨である。⁽³¹⁾

『背徳者』の場合を見てみよう。他者の存在に目が開かれた時に、病気がミシェルを襲う。病気はミシェルに生命が生き延びるに不可欠でないものは一切排除するよう強いる。今まで彼が身につけてきた衣、マスク（教育、道徳）を一枚一枚剥ぎとって、本来の彼の姿——「自分の奥底にある願望の総体」——を露わにしてゆく。こうして様々な覆いの下に眠っていたミシェルの感覚が目覚める。⁽³²⁾

長らく生死をさまよいつけたミシェルがある日、回復の兆しを身に感じた時、彼の生の意識がいままでとは一変する。生きていること自体が彼を歓喜で満たし、打ち震わせる。一進一退を繰り返す徐々にはあるが、回復してゆくミシェルはもはや以前のようにものを見たり聞いたり（理解するという意味で entendre）していない。

《Je regardai. L'ombre était mobile et légère; elle ne tombait pas sur le sol, et semblait à peine y poser. O lumière! — J'écoutai. Qu'entendis-je? Rien; tout: je m'amusais de chaque bruit.》⁽³³⁾

音を意味を解するために聞いているのではなく、音自体を聞いているのであり、《Je regardai.》はもの自体を見ているからである。ところで、このようなものの見方、聞き方はミシェルを社会から増々乖離させ、背徳行為へと彼を向かわせる機能を果す。

ミシェルは一つ一つ発見してゆく。ものごとを一つ一つ解釈し直してゆくことになる。『背徳者』はミシェルが自らの背徳行為を三人の友に物語るという形式をとっており、単純過去で話がすすめられる。ところが単純過去で物語っているうちに、ある事柄が物語の枠を破って物語っている現在のミシェルの意識を支配してしまうことがある。ミシェルが彼の奥底に潜む願望に突き当たっ

た時である。

《Et soudain me prit un désir, une envie, quelque chose de plus furieux, de plus impérieux que tout ce que j'avais ressenti jusqu'alors: vivre! je veux vivre. Je veux vivre.⁽³⁴⁾》

単純過去—(不定法)—現在形への変化は、「生きる、僕は生きたい、そうだ僕は生きたいんだ」というふうに自らの願望を発見してゆく過程に対応する。ところで《...: vivre! je veux vivre. Je veux vivre.》という表現は、他者の存在を認識してゆく過程を表現した《... Marceline, ma femme, dormir.》と基本的には同じである。

つまり、〈突然... が明らかになった〉という表現形式が『背徳者』に基本的なものなのである。この発見、認識してゆく過程を写す表現方法に (i) pour la première fois (ii) 単純過去—現在形 (iii) 半過去—単純過去が主として使用されている。

《Brusquement, avec une évidence effarante, il m'apparut que je ne m'étais pas soigné comme il fallait. Jusqu'alors je m'étais laissé vivre, me fiant au plus vague espoir; brusquement ma vie m'apparut attaquée, attaquée atrocement à son centre.⁽³⁵⁾》

他方、この引用文には重要なことがもうひとつ含まれている。〈attaquée〉である。ミシェルが発見したのは、自分の生命が攻撃されていることなのだ。敵はミシエルの「内部に生きており」、彼の生命を涸渇させようとする。敵を我々に内在化されている現行の道徳と読みかえておくのもよいだろう。攻撃されたら防禦するしかない。正当防衛ではないか！ここでミシエルの stratégie (戦術) という用語を使う。この用語は戦い、目的を達成するための手段、一時なことを含意する。戦術は彼の生命を生き延びさせるものすべてを「善」とし、反対に生命を涸渇させるものすべてを斥けることにある。

注意したいのは、彼が生命を涸渇させるものとして、「文化」、「慎しみ」、「道徳」の三つを挙げていることであり、これらを自分から剝ぎとった時、そ

こに本来の自分《le *vieil homme*⁽³⁶⁾》が見い出されるとしていることである。《le *vieil homme*》の発見、即ち《un *nouvel être*》として完全に蘇生することが彼にとって至上命令となったのである。

ミシュルの背徳の歴史が始まる。彼がよろこびを最も素直に表現できる同性愛⁽³⁷⁾、所有観念の欠如からくる盗みの黙認、一方で密猟を取り締まりながら、他方で奨励するという詐欺行為。

ミシュルが背徳を犯す度に、現行道徳の体现者であるマルスリヌの病状が決まって悪化する——今では病気に陥っているのは彼女である。彼が「自分の奥底にある願望の総体」を実現してゆくに従って、彼女は無力化してゆくのである。彼は瘦せ衰えた彼女を旅から旅へとひきずり回して遂に殺してしまう。驚くべきことに——しかしここでは当然の帰結として——信仰を全く失ってしまうのはミシュルよりもむしろマルスリヌなのである。この事態を前にして、自らの願望の総体をすでに生きることが出来るメナルクとは違い、ミシュルは跪くより為す術をもたない。

《De nouveau je ramasse le chapelet; je le lui remets dans la main, mais de nouveau elle le laisse — que dis-je? elle le fait tomber. Je m'agenouille auprès d'elle et presse sa main contre moi.⁽³⁸⁾》

以上で『背徳者』を表現形式と内容との関連からみてきたわけだが、最後の締めくくりとして、今一度出発点に戻る必要がある。出発点とはジッドの書いたものを、同性愛の擁護という観点から読むことだった。他方、他者の認識に始まり、不可抗力としての病気を介在させて、自己の発見に至るという『背徳者』の基本的な表現形式は、ものごとを発見し認識してゆく過程を表現するものであった。してみると、『背徳者』では同性愛を発見していったものとして提示することにより、同性愛を擁護しているとみることが出来る。「自分の奥底にある願望の総体」を実現しようとしなければ、生命を維持できないことを発見したという形で同性愛を提示し擁護したのだ。

実際、『背徳者』を読み終えた時、ミシュルの話を聞き終えた三人の友同様、

読者もミシェルに対して何か非難めいた気持ちにはなれない。むしろ現行の道徳に対する反省を我々自身に迫るものであり、『背徳者』はミシエルの、そしてジッド自身の道徳感を判断することから読者を遠ざけることに成功していると言える。とりもなおさず、この成功は発見してゆくという形で同性愛を提示しているからであるが、実はもうひとつ、『背徳者』の物語形式にもよるのである。『背徳者』はミシェルが〈je〉を含めた三人の友に彼の身に起きた事件を物語るという形式をとっていることはすでに述べた。この形式によって、ミシエルの〈je〉、話者(聞き手のひとり)の〈je〉そして作者の三者が、変幻自在な〈Je〉の空間を作り出す。ある時はミシエルの〈je〉に話者の〈je〉と作者が重なり、ある時は作者がひとり離れて残りの両者を客観的に眺め、ある時には三者互いに離れる。いわば『背徳者』では作者の存在が曖昧になってゆき、読者自身の〈Je〉が検討すべき問題が浮びあがっている。

注

- (1) Jean Delay, *La Jeunesse d'André Gide*, 2 vol., Paris, Gallimard, 1956-1957
- (2) Claude Martin は“Toujours vivant, toujours secret...” (*Études littéraires*, vol. 2, n° 3, déc. 1969, pp. 289-303.) という論文でジッド研究の現状を概観しており、ヌヴェル・クリティックの側からのジッド研究が皆無に近いことを嘆いている。
- (3) ジャン・ドレの大作 *La Jeunesse d'André Gide* は結局のところ、『一粒の麦もし死なずば』を敷衍しているにすぎない。ジッドが書き残したもの(覚え書き、往復書簡、読書ノート、作品等)をすべて資料として同一水準に置き、ジッドを描き出そうとしたものであったが、André Gide ou l'Ambiguïté という結論がこの種の研究の限界を暗示している。しかしこの著作は今後のジッド研究に資料として大いに役立つであろう。全てを資料として読んだがためにその研究は資料として役立つことになったとは皮肉なことであり、教訓的である。
- (4) ロラン・バルト/平岡篤頼訳「物語の構造分析序説」(『現代のエスプリ』58号, 194—204頁。——『パイディア』(竹内書店)1970年秋, 冬号より抄録。)この論文については原文(Roland Barthes, “Introduction à l'analyse structurale des récits”, *Communications*, n° 8, 1966.)に当たっていないことを断っておく。
- (5) この一文はジッドが *Et nunc manet in te* (in *Journal 1939-1949—Souvenirs*, *Bibl. de la Pléiade*, 1954, p.1134.)の中でマドレーヌの言葉として伝えているもの

である。

- (6) Henri Rambaud, “La phrase de Madeleine”, *Cahiers André Gide*, vol. I (Gallimard, 1969), pp. 319-370.
- (7) Philippe Lejeune, “Gide et l'autobiographie”, *La Revue des lettres modernes*, nos 374-379 (1973), pp. 31-69.
- (8) *Le Traité du Narcisse* in *Romans, récits et soties, œuvres lyriques*, Bibl. de la Pléiade (Paris, Gallimard), 1958, p. 8. 邦訳『ナルシス論』は『ユリアンの旅』(伊吹武彦他訳, 青銅社, 1976年)に収録されている。
- (9) *Journal 1889-1939*, Bibl. de la Pléiade, 1951, p. 92. この考え方は彼の第一作『アンドレ・ワルテルの手記』にすでに現われているばかりでなく, 晩年の作『テゼ』にも見い出されるものである。〈Nous vivons pour manifester; mais souvent involontairement, inconsciemment, et pour des vérités que nous ne savons pas, car nous sommes ignorants de notre propre raison d'être.〉(*Les Cahiers d'André Walter* in *André Walter Cahiers et Poésies, Les Œuvres Représentatives*, G. C. Crès, 1930, p. 159.) / 〈Icare était, dès avant de naître, et reste après sa mort, l'image de l'inquiétude humaine, de la recherche, de l'essor de la poésie, que durant sa courte vie il incarne.〉(*Thésée* in *Romans, etc.*, Bibl. de la pléiade, 1958, p. 1436.)
- (10) *Le Traité du Narcisse*, pp. 8-9.
- (11) *Journal 1889-1939*, pp. 29-30 [11 janv. 1892].
- (12) *Ibid.*, pp. 27-28.
- (13) *Ainsi soit-il* in *Journal 1939-1949 — Souvenirs*, Bibl. de la Pléiade, 1954, p. 1217.
- (14) Dušan Matić は “Pour une relecture de Gide” (*Cahiers André Gide*, vol. III (Gallimard, 1972), pp. 45-73. — traduit du serbo-croate par Pierre Chesnais) という論文で, ジッドのテキストすべての底流に, 何か最も基本的なものを否認されて, 訴訟を起している人間の調子が読みとれることを指摘している。〈Eh oui! Procès! Son œuvre tout entière est un procès, ses soixante années de travail le sont. (...) / Et ce ton est latent sous chacun de ses textes comme un courant souterrain continu.〉 (*Op. cit.*, pp. 65-66.)
- (15) *Journal 1889-1939*, pp. 33-34.
- (16) *Ibid.*, p. 44 [10 oct. 1893].
- (17) *Ibid.*, p. 35. 他方, 『アンドレ・ワルテルの手記』もこのテーマを扱ったものとして読める。

- (18) 中川久定「ヨーロッパにおける自伝の文学——ルソーとスタンダールの作品に即して——」（『図書』348号，63頁）。
- (19) ジッドが《Subjectif》と名付けた読書ノートを見ると，1892年4月頃から1893年10月のアフリカ旅行直前までゲーテを耽読したようである。例えば，*Elégies latines* についてこういうコメントがつけられている。（…）《auront été de toute cette année ma plus grande influence. J'étais préparé parfaitement par *Wilhelm Meister* et le reste》。（Jaques Cotnam, “Le 《Subjectif》 d'André Gide”, *Cahiers André Gide*, vol. I, p.73.）他方，『日記』の中では，アフリカ旅行に先立つ一ヶ月間にゲーテについて色々と言っている。特にこの一文を引用しておこう。《II [Goethe] a pensé que le spectacle de son bonheur contribuerait plus au bonheur des autres que de dures et douloureuses lutttes contre leur misère.》（*Journal 1889-1939*, p.44.）
- (20) *Les Faux-Monnayeurs* in *Romans, etc.*, Bibl. de la Pléiade, 1958, p.1180.
- (21) 特にこの幸福感の表現が見い出されるのは，『告白』の第五巻の終わりから第六巻の前半にかけてである。この点については，中川，前掲（『図書』347号，348号）を参照した。
- (22) 作品を読む時，何をもってこないと理解できないかを意識化する。すると何かが浮びあがってくる。こういう作品の読み方を暗示してくれたのは大橋保夫氏である。
- (23) *L'Immoraliste* in *Romans, récits et soties, œuvres lyriques*, Bibl. de la Pléiade, 1958, p.373.
- (24) *Ibid.*, p.373 et p.374.
- (25) *Ibid.*, p.375.
- (26) *Idem.*
- (27) *Idem.*
- (28) *Idem.*
- (29) 《Je venais de comprendre enfin que là cessait le monologue.》（*L'Immoraliste*, p.376.）
- (30) *L'Immoraliste*, p.376.
- (31) 《De l'utilité de la maladie.》と題して，『日記』にこう書いている。《La maladie propose à l'homme une inquiétude nouvelle, qu'il s'agit de légitimer. La valeur de Rousseau, de même que celle de Nietzsche, vient de là. Sans sa maladie, Rousseau n'eût été qu'un rhéteur insupportable à la manière de Cicéron.》（*Journal 1889-1939*, p.98.）
- (32) Voir *L'Immoraliste*, p.390.

③③ *Ibid.*, p. 390.

③④ *Ibid.*, p. 383.

③⑤ *Ibid.*, p. 384.

③⑥ *Ibid.*, p. 398.

③⑦ マルスリィヌ、成人したシャルル——既成道徳を素直に受け入れることができた人々——の前では、ミシェルは思い切ってよろこびを表現できない。何かしらごちなくなってしまう、よろこびがその頂点にまで達せず、中途半端に終わってしまう。V. *L'Immoraliste*, p. 388, p. 404 et p. 413.

③⑧ *L'Immoraliste*, p. 470.